

ノンフィルムの森④ リュミエール協会

岡田 秀則
Hidenori Okada

連載：
フィルム・アーカイブ
の諸問題
第71回

承前

淡彩の“リュミエール”へ

リュミエール兄弟の出身地であるリヨンへ旅立つ前にまずここを訪問しなければ、と思い立ってパリ郊外ブローニュのアルベール・カーン博物館(Musée Départemental Albert Kahn)へ赴いた。ここは、アルザス出身のユダヤ系銀行家アルベール・カーンが、1909年から世界恐慌で破産した直後の1931年までの22年間、莫大な私財を投じ、スタッフを世界各国に派遣して撮らせたオートクローム写真(約7万2,000枚)と記録フィルム(約17万メートル)を保存する世界的にも珍しい映像博物館である。世界を映画フィルムに収めただけでなくすでに19世紀末にリュミエール兄弟が成し遂げた仕事だが、カーンの事業がそれと異なるのは、明らかに学術的、社会還元的なビジョンを持っていたことである。カーンは自分らの集めた映像資料の総体を「地球映像資料館」(Les Archives de la Planète)と呼び、真摯な気持ちで世界の人々の相互理解と平和に役立てようと考えていたという。だが破産したカーンはすべてを失って1940年には死去した。戦後、邸宅や所蔵資料はブローニュが属するオー＝ド＝セーヌ県の所有となり、可燃性のオリジナル・フィルムも現在はCNCフィルム・アーカイブへ寄託されている。写真と映画、両方の機材を携えたカーンの撮影技師たちがカバーした地域は広い。1926年から27年にかけて日本にもロジェ・デュマというカメラマンが派遣されているが、いまだ日本側からの学術的なアプローチはないようで、今後の研究課題となり得るであろう*。

思うに、世界の写真史の中でも、オートクロ

ームはもっとも偏愛に値する技術の一つではないだろうか。近くに寄ってみると、微細に埋め込まれた淡い三色の粒々が見る者に甘美な印象をもたらす世界で最初のカラー写真である(開発は1903年)。カーンの邸宅跡地に建てられた博物館では、オートクローム写真はすべて透明プラスチック板上に複製したものを背後から光で照らすようにしてあり、さらに魅惑的な効果を私たちに与えている。そして、この色彩写真の発明者が、ほかでもないオーギュストとルイのリュミエール兄弟であった。静かなパリ郊外で、「映画の発明者」という文句だけではすくい切れ

ない兄弟の仕事の拡がりに触れて、ややざわついた感情を抱えたままリヨンへ向かった。

「最初の映画」という土地

地下鉄の最寄り駅が「モンプレジール＝リュミエール駅」、そして「25, Rue du premier-film」(最初の映画通り25番地)という住所。リュミエール協会は、現在であれば市の中心部と呼べるだろうが、ローヌ川とソーヌ川の中洲周辺を旧市街とするならば、もともとは市内のかなり東方に位置していたことになる。というのも、この敷地は19世紀であればまだ郊外であったら



地下鉄モンプレジール＝リュミエール駅前の巨大な記念碑
「この地区でリュミエール兄弟は映画を発明した」と書かれている。



リュミエール協会の博物館
アントワーヌ・リュミエールとその一家の邸宅を改築して作られた博物館。邸宅だった頃、地元の住民は「シャトー・リュミエール(リュミエール城)」と呼んでいたという。



リュミエール公園に立つ解説板

博物館と上映ホールの中に「リュミエール公園」があり、リュミエール家の歴史的事業がいくつかの解説板で示されている。これはオートクロームの発明を解説したもの。

リュミエール工場の模型と兄弟の肖像
左がオーギュスト(兄)で右がルイ(弟)。

うリュミエール社の大工場の跡地を利用したものであり、地上3階・地下1階からなる博物館も1902年に完成したリュミエール家の邸宅を改造したものだからである。ステンドグラス窓やシャンデリアなど当時の面影を残しているこの豪華な館は、フランスのシネマテーク界でも屈指の優雅な建造物だろう。

リュミエール協会は1982年、映画批評誌『ポジティブ』の創立者であった批評家ベルナール・シャルデールにより設立された。シネマテーク・フランセーズやシネマテーク・ド・トゥールーズに比べれば歴史は浅いが、フランスの他のシネマテークと同様に1901年法によるアソシエーション組織であり、現在のスタッフ数は27名。ローヌ＝アルプ地方で唯一のFIAF加盟シネマテーク組織である。

博物館の展示はほぼ常設のもので、当時パリのボンピドゥー・センターの文化事業部長を勤めていたドミニク・パイニが構成を担当し



リュミエール兄弟の開発した義手

図書室
パソコン端末でシネマトグラフ・リュミエールの全1,428作品が閲覧できる。

た。その全体は、地元の有力企業としての同社の歴史を幅広くたどるものであり、1870年にリヨンに居を定めた父アントワーズによる写真製品の製造業から説き起こされている。前述のオートクローム写真はもちろん、映画以外のさまざまな発明に視野を広げないとこの“光の家族”への正確な理解は得られない。1890年前後にルイが開発した高感度の乾板感光材「エチケット・ブルー(青ラベル)」、大きな円筒の内側全面につなぎ合わされた写真を愉しむフォトラマ(Photorama)といった写真関連の発明(1901年)はもちろん、とりわけ第一次世界大戦中には負傷兵士のための義手まで量産していたというから驚かされる。その後も1970年代まで写真材料を製造していた同社は、地元では人々の記憶から消えてしまった企業では決していない。

もちろん、“最初の映画”たるシネマトグラフの発明には大きなコーナーが設けられており、一連のプレシネマ機材とともに、映画の発明へと至る道のりが詳細に解説されている。1895年12月28日にパリの「グラン・カフェ」で使用されたシネマトグラフ1号機がケース内に鎮座している様は神々しくさえあったが、これらのプレシネマ期機材は、2003年にリヨン市が蒐集家ポール・ジェナールから入手したものである。また2階には、兄弟によってメキシコや日本へ派遣された若きカメラマン、ガブリエル・ヴェールに焦点を当てた特設のコーナーがあり、その「シネマトグラフの青春」が紹介されている。

批評の伝統とシネマテーク

また、1987年に開かれた図書室では、現在約9,000冊の書籍と600種の雑誌を閲覧できるほか、兄弟が指揮して撮らせた全1,428本のシネマトグラフ・リュミエールの映像を書籍検索用のパソコン上で観ることができる。他のノンフィルム資料としては、約26,000枚のポスター、約8,000組(枚数不明)のスチル写真、約3万枚のプレス資料などがあり、また映画人・映画

団体資料としては、協会の理事長でもあるベルトラン・タヴェルニエ監督、プロデューサーのアナトール・ドーマン、犯罪映画で知られるジャック・ドレー監督の資料が所蔵されているが、何よりも重要度が高いのはリュミエール家の関連資料(企業資料・家族写真など)であろう。協会の所蔵品は外部にも貸し出され、例えばオートクローム写真については、かつて地元リヨンで実施された展覧会を外国にも巡回させているという。

現在は上映活動にも力を入れており、フィルムの所蔵数はすでに約8,000本に届いている。1998年に新築された映像ホール(269席)は、『工場の出口』で知られるかつての同社の工場や映画倉庫(Hangar du Premier-Film)の敷地に建っている。筆者の訪問時にちょうどシドニー・ルメット監督特集をやっていたことから分かる通り、批評の面からは、創立以来『ポジティブ』誌の影響が強いようである。出版事業においてもジョン・ブアマンやジャン・オーランシュといった『カイエ・デュ・シネマ』ではほとんど取り上げられない映画人に注目しているのが特徴的だ。半世紀にわたって対立してきた二つの雑誌の伝統が、こうしてシネマテーク活動にも影響しているのは実にフランス的な現象と言うよりない。

そんな空気まで感じ取りながらシネマテーク活動を眺めてみると、パリとその周辺だけを眺めてフランスの映画保存の現在を理解したつもりでいることが、どこか誤っているように感じられてくる。フィルムであれノンフィルムであれ、パリとは距離を置いたアーカイブの構築を目指す様には新鮮さを感じずにはいられなかったが、実は、その点で真に印象深かったのはむしろ次の訪問地トゥールーズであった。 次号に続く
(フィルムセンター主任研究員)

* 2009年、『アルベール・カラン コレクション よみがえる100年前の世界』(日本放送出版協会)が刊行され、カランの派遣したカメラマンの仕事が日本語の出版物として初めて公になった。その中にはデュマが日本で撮影したオートクローム写真も含まれている。